
信じてる・・・

MEL

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

信じてる・・・

【Nコード】

N0781A

【作者名】

M E L

【あらすじ】

新一が黒の組織を潰して1ヶ月が経とうとしていた頃に転校生が来た。その転校生はなんと江戸川コナンの正体が新一だと知っていた！！そして快斗や平次達のところにも転校生が！！！！彼らの正体はそして彼らの目的とは！？

1 いつもの朝

第1部いつもの朝

突然襲ってきた悪夢。

始まりはある転校生がきっかけだった。

「新ー！早くしないと学校遅れるよー！！」

「わかってるよー！！今行くから待ってる。」

ガチャ

「おはよう新ー。早く行こう」

「ああ。」

黒の組織を潰して1ヶ月。俺は補習やら事件やらでまた忙しい生活を送っていた。

「そういえば新ー。今日転校生がくるんだって！聞いた話じゃ女の子らしいよ。」

「へえ！転校生か。こんな時期に珍しいな。」

「うん。なんか親の都合らしいよ。どんな子かなー楽しみだね。」

「ああ。そうだな」

ざわざわざわ

ガラッ

「おはよー蘭。今日も愛しの亭主とご登校？」

「ち、ちがうわよ／＼／＼／」

園子はいつものように蘭をからかった。蘭はそれを真っ赤になって否定した。

俺はとりあえず席に着いた。

「おい、工藤。おまえも賭けさんかしねーか？」

「賭け？」

「ああ。今日転校生が来るだろそれでどんな子が賭けすんだよ当てた奴にはトロピカルン

ドのパスポート2枚くれるってさ。どうだ参加してみねーか？」

「誰だよそんな賭け持ち出した奴。まさか沢田の奴じゃねーだろうな？」

「ご名答！……さすが名探偵だな。」

俺は心底呆れてしまった。沢田という奴は賭け事がからつきしだめなのに自分から賭け事を

持ち出しては負けている奴だ。何度かやめとけとは言ってるもののちつとも聞かない

どーしようもない奴だ。でも、クラスのムードメーカーで明るい奴だからみんなよく沢田

の持ち出す賭け事に付き合っていた。

「で？やるか工藤？」

今回の賭けは割りとよさそうだったからやることにした。

「そうだな。俺も参加するか！」

「よっしゃ！……そうこなきや。それじゃあこの三つのどれかに票いれるよ。」

そういつてノートを開いた。

「なんだよこれ？」

「どんな子が予想したやつだよ。ちなみに1番人気は清楚な美人だな。」

残りの二つはおちやめでかわいいと活発で元気だった。俺は票が1票もない活発で元気にした。

「マジかよ！……工藤勝負に出たな？」

「出てねーよ。それにこれおまえらの予想っていうより希望だろ？」

「うっ！……名探偵には敵わねーな。お、来た来た！……それじゃあ工藤負けたときは勝った奴に200円払うことになってるからな。ま、お互いがんばろうや。」

「はいはい。」

俺はその時はまだ気づかなかった。彼女と出会ったことであのいやな事件がまた起ころうと
していたことを……。

あとがき

初めましてMELです。今回新一君としゃべっていた男子生徒の名前がありませんがそこら辺はみなさんのご想像におまかせします。オリキャラも続々と出てきますのでお楽しみに~~~~!!

2 転校生

「おーいおまえら席に着けよ。今日は転校生を紹介するぞ。」

その担任の一言でクラス中がざわめきだした。

「静かにしろよ。君、入りなさい。」

コツコツコツ

「初めまして。北海道の菊山高校から来ました日野明ひのあかりです。」

クラスからはかっこいい〜だとか、かわいいだとか絶賛の声が上がった。

「日野の席は毛利の後ろだ。」

「はい。」

そういつて日野は自分の席に向かった。

「よろしくね。毛利さん」

「うん！よろしく！」

蘭は無邪気な笑顔でいった。

「それじゃあ工藤お前総務だから学校の案内とかたのんだぞ。」

「あ、はい。わかりました」

この日に限って女子の総務がいなかったから案内は俺になった。

「工藤。おまえの一人勝ちなんてずるいぞー！」

「賭けは賭けだろ。たまたまついてただけだよ」

「あゝあ。まさかうちのクラスにスポーツ万能系が来るとは・・・。

読みが甘かったか！」

「でも、あの子北海道のスポーツの名門校の菊山からきたんだろ？

なら運動オンチってことは

まず、ないだろうな」

「春っちだつてかわいい子が来るって賭けてたくせに・・・。」

加藤の嫌味を春山はさらりと流して続けた。

「工藤の運には敵わなかったってことだな！そんじゃ明日掛け金持つてくつから案内がなばれよ総務さん？」

「へいへい。わかってますよ」

そのころ女子が日野を囲んでなにやら話が盛り上がっていた。

「日野さんってどっかの馬鹿な男子よりずっとかっこいいよねー。

モデルの仕事とかやってる

の？」

「まさか！やってないわよ。それにみんなの方がスタイルいいじゃない。」

「そんなことないよ。でも、蘭だったら誰が見ても羨ましい体型してるからな。」

「蘭？」

「うん。毛利蘭よ。あなたの前の席の子ほら今工藤君としゃべってる子」

「ああ。あのかわいい子ね」

「蘭はかわいだけじゃないのよ」

「わあ！？びつくりした。いきなり出てこないでよ園子」

「ごめんごめん。そこまで驚くとは思わなかったからさ」

「鈴木さんは毛利さんと仲いいの？」

「園子でいいわよ。私と蘭は親友だからね。蘭はかわいだけじゃなくて強いし優しいし」

「明るい子よ！あ、それと工藤君の妻だしね」

「妻！？」

「そ！あの二人公認の仲にもかかわらず、ずっとただの幼馴染だつて言い張ってるからね」

「ふん。そうなの」

そう言つて彼女は不敵な笑みを浮かべた。

~~~~~放課後~~~~~

「工藤君学校の案内してくれる？」

「ああ。いいよ。蘭悪いけど下駄箱で待っていてくれないか？」

「うん、わかった。ちゃんと案内しなさいよ！」

「わーてるよ。」

蘭にそう言っ て俺と彼女は歩き出した。

「こつちが調理室でそつちが被服室三階のつきあたりが図書室」

~~~~~

「あ！ごめん携帯の電源切るの忘れちゃった。」

「いいよ別に気にしなくて。急ぎの連絡かもしれないから見といた
ら？」

「うん、ごめんね。」

彼女は携帯の画面を見ながら一瞬不可解な顔をしたがすぐに携帯を
制服のポケットに入れた。

「どうした？悪戯だったのか？」

「え？ちがうよ。親がそろそろ帰れって・・・。」

「門限厳しいんだな。そんじゃそろそろ帰るか案内も終わったし・
。じゃあな気をつけて

帰れよ」

「うん。また、明日ね」

新一の走り去る姿を見送って彼女は静かに呟いた。

「さよなら。江戸川コナン君」

2 転校生（後書き）

なかなか話が進みませんが次話くらいでやっと敵らしき奴等の仲間が出てきます。

3 怪しき影

「それでねお父さんたらまた階段から落ちそうになって」
「ハハおじさんらしいな」

~~~~~

新一は携帯の画面を見るなり大きな溜息をした。

「またか・・・」

「誰から？また事件？」

「いや・・・とんだお騒がせ野郎達からだよ」

「出なくていいの？ずっと鳴ってるけど」

「いいんだよ。人の話聞いてないあいづらが悪い」

そういつて新一は携帯の電源を切ってしまった。

「いいの？切っちゃったら警察の人新一に連絡できなくなっちゃうよ」

「平気だよ。家着くまで電源切るだけだから」

~~~~~米花公園前~~~~~

「悪いな家まで遅れなくて」

「いいわよまだ明るいし。それより早く帰ったら人待たしてるんでしょ？」

「え？ああ、まあな。それじゃあまたな蘭」

「うん。またね」

新一は蘭と別れるなり全速力で自宅に向かった。

「変な新一」

その頃工藤家前では2人の青年が佇んでいた。

「なんでや？なんでおらんのや工藤ーーーー！！！」

その二人の青年のうちの一人が工藤家の前で絶叫していた。

「さつき連絡したからな。でもすぐ来るだろ今頃全力疾走してこっち向かってるんじゃないの？」

絶叫していた青年はその言葉を聴くなり呆れた顔を向けて言った。

「まさか、またやったんやないやろな？」

「だってこうでもしなきゃ新一すぐ来てくれないじゃん！」

「工藤怒るやろうな」

「お！噂をすればご本人の登場だな」

「おい・・・快斗・・・おまえ・・・今度は・・・うちに何仕掛けたんだ」

新一は肩で大きく息をしながら快斗を睨みつけた。

「そんな怖い顔しなくても今回は役に立つことしかしてないから大丈夫だって」

嘘だと思いつつとりあえず家に入ることにした。

「お疲れさん工藤。とりあえず快斗の仕掛けたものの撤去がんばれや」

「快斗が仕掛けるの止めなかったオメエーにも責任あるんだから手伝えよ」

「げっ！そんな堪忍してや工藤あいつ前やったとき工藤にこってり絞られたからもうやらん思ってたんや」

「理由はどうあれお前にも責任あるんだから絶対手伝えよ！！」

「工藤の鬼」

「何やってんだよ早く来ないとコーヒー冷めちゃうぞ」

元凶である快斗は二人が玄関で話している間にさっさとコーヒーを用意していたらしい。

「快斗。おまえな」

人んちに何か仕掛けた拳句勝手にコーヒーを淹れてる快斗に新一は呆れるしかなかった。

~~~~~工藤邸近辺~~~~~

「こちら桜。ターゲットは自宅に入ったわどうする拓兄」

「よし。俺と明がつくまで引き続き見張っててくれ奴等も近くにいるかもしれないから気をつけるよ」

「了解」



### 3 怪しき影（後書き）

私が書く快斗君は悪戯好きなやつですがこの悪戯が後々結構役に立ちます。お楽しみに！！

#### 第4話突然の訪問者

木の上で双眼鏡を使い工藤邸を監視している一人の少女。少女はしばらく監視をしていた

が工藤邸に近づく一台の青い車を見つけるなり木から飛び降りその車がいる所に向って行った

「拓兄！お姉ちゃん！」

「こら大声出すな！見つかるだろ」

拓兄と呼ばれた男はショートカットに黒のトレーナーにジーパンというラフな格好をしていた

「だってこの頃全然拓兄と会ってなくて寂しかったんだもん」

「ったく。とりあえず中入れそこにいつまでもいたら風引くぞ」

「うんvやつぱ拓兄は優しいね」

「そりやどーも」

「お疲れ様、桜。それじゃあ、作戦の確認をするわよ」

「了解」

~~~~~工藤邸リビング~~~~~

「そんじゃあ聞かせてもらおうかアポもなしに突然うちに来た理由を」

「話すからその怒りのオーラなんとかしてくんない？」

「あんなけ来るときはアポとれって言ったよな快斗君？」

暖房がついているにもかかわらずこのリビングは南極か北極を思わせるような寒さを感じた快斗は平次に助けを求めた。

「ま、まあ堪忍したってや工藤。俺も快斗も今日はちょっと相談にきたんやから・・・」

「相談なんて電話でもできるだろ・・・まあ、お前らがアポなしで来んのは今に始まったことじゃないけどな。とりあえず今回は許してやる今度やったらうちの出入り禁止にすっからな」

とりあえずをしっかり強調して新一は話を続けた。

「で？何だよ相談って」

「実は今日俺と平次の学校に転校生が来たんだ。その転校生の名前が・・・」

「日野桜と日向拓人・・・でしょ？」

突然声のした方に振り向いた。そこには不敵な笑みをしている日野明と長身の男が立っていた

「呼び鈴もなしに人んちに入ってくるなんてどうかと思うぜ日野」

「あら？呼び鈴なら何回も押したけど出てくる様子がなかったから勝手に入らせてもらったわごめんなさいね」

「そんなことより何か用があつてきたんだろ？」

「ええ。ちよつと頼みたいことがあつてね」

「こつちは聞きたいことが山ほどあるからな。先にそつちを答えてもらうぜ」

「構わないわよ」

とりあえず二人をソファーに座るように促し快斗が二人に珈琲を出して話が始まった。

「まず、お前らが何者か教えてもらおうか」

「私達は・・・FBIの特別作業員よ。あなたたちが関わったある組織を追っているの」

「ある組織って工藤を小さくしたあの組織か？」

「ええ、そうよ」

「でも、そのことならとつくに決着^{ケリ}ついてるぜ」

「あまいね君達はそれで本当に決着がついたと思つてんの？」

「今度は誰だよ（怒）」

「私は日野桜。日野明の双子の妹だよ。よろしくね！」

セミロングのウェーブがかった髪をポニーテールにした可愛らしい女の子が笑顔で新一の怒りのオーラをさらりと流した。

『お、大物や。工藤のあのオーラをさらりと流すとは・・・』

そんな大物に快斗はゆっくりと近づいた。

「桜ちゃん人んち監視するならもっといい方法教えようか？」

桜は一瞬驚いたがすぐに同じ調子で返した。

「何のこと？私はお姉ちゃんについてきたただだよ？」

それを聞いた快斗は悪戯っ子の様に笑った。

「ふ〜ん。それじゃあこれなーんだ？」

快斗の手には一枚の写真があり、それは桜が双眼鏡で監視をしている写真だった。

「何これ！？カメラなんかどこにもなかったのに・・・あ」

「桜。あんたね」

「ごめん。驚いちゃって・・・」

「な！だから役に立つって言っただろ」

ゴンッ

「痛ってー！！何すんだよ新一！」

「テメーが勝手にカメラなんか仕掛けるからに決まってるだろ！！」

「すみません」

この光景を呆然と見ていた拓人はハッとして我に返った。

「話を戻すけど、君達が壊滅させた組織が最近になって復活したという情報が入ってきたんだ」

「・・・なんだって（なんやて）！！？」

「そこで相談なんだが・・・」

ピンポン

「またか（怒）」

新一はぶつぶつ言いながら玄関に向かった。

「何や今日はえらい客多いな」

「いいんじゃないーのこうゆう日があっても。そう思わない？ってあれ？」

「どないしたんや快斗？あいつら・・・何処行きよったん？」

「俺にに聞かれても・・・」

そこには一枚のカードと空のティーカップが置いてあるだけだった。

第4話突然の訪問者（後書き）

めちゃくちゃ久しぶりの投稿です。やっと快斗君につけた設定が少し生かされたと思います。

次回は彼女達も出て来てこれまた大変なことになっちゃいます！お楽しみに！！

5 それぞれの再会

ピンポーン ピンポーン ピンポーン

「ったくうるせな！誰だよ。どちら様？」

ガチャ

「「おじゃましーす！！！」」

呼び鈴を何度も押した客人を見て新一は固まってしまった。

「さあ青子ちゃん和葉ちゃん入って入って」

「え？でも蘭ちゃん新一君が・・」

「ん？新一どうしたのよ新一？」

何度か蘭に声をかけられようやく我に返った新一は蘭を問い詰めた。
「なんでおまえここに居んだ？おじさんは？何で青子ちゃんたちまで！？」

「ちよつと落ち着いてよ。今日はお父さん仕事で遅くなるの！だから今日は夕飯

作りに行くって朝言ったでしょ。青子ちゃんたちは快斗君と服部君とはぐれちゃって家に来てないかって尋ねにきたのよ！それでもしかしたら新一の家にいるかもしれないってことで一緒に来たの」

「そうだったのか。わりーなわざわざ夕飯つくりに来てくれること俺すっかり・・」

「忘れてたんでしょ！しょうがないわね。でも、今日は久しぶりにぎやかになりそうだしみんなに免じて許してあげる。今度からはちゃんと覚えててよ」

「ああ。それにしても騒がしいなその内物の投げ合いでも始まりそうだな」

「それだけ二人とも心配してたってことよ。新一もあんまり心配かけさせないでね？じゃないとじゃないともうご飯作りに来てあげないよ！」

そういつて蘭はウインクをしてみせた。

「肝に銘じとくよ」

その頃リビングでは追っかけが行われていた。

「平次！何で勝手に東京来て工藤君家におるの！あんたが待つとけて行つたから待つてたのにどうゆうつもりなん」

「落ち着け和葉。これには深い理由があつてやなつて和葉人ん家のもの投げんなや」

「4時間も連絡もせんで待たせて何言うとんの！！ちゃんとおとしまえつけさせてもらうからね」

「だから俺の話し聞けや」

「問答無用！！」

工藤家のクッションを投げたり追いかけてたり追いかけられたりと平次達の喧嘩はなかなか収まりそうにもなかった。

一方快斗達と言うと青子が快斗をずっと睨み付けていた。

「何で・・連絡くれなかつたの」

「いやなんて言うか・・」

「連絡ぐらいできたでしょ！青子ずっと待つてたんだよ！！快斗になんかあつたんじゃないかつて思つてつ・・かいとのつばか」

「わっ泣くなつて青子悪かつたつてだから泣くなつて」

「快斗のうそつき」ちゃんと約束したのに絶対来るつていったのにはかー」

「いやだから悪かつたつてたのむ泣き止んでくれ」

「うわーん」

快斗は青子を泣き止ますために必死に誤つて平次達はひたすら部屋で和葉が怒鳴りながら平次を追いかけて工藤家のリビングが見事に痴話喧嘩の戦場と化してしまった。

「あらら随分すごいことになつてゐるわね」

「頼むから来るたんびに俺ん家で喧嘩しないでくれ」

「そうね。そろそろ止めないと新一の家に穴空いちゃうかもしれないわね」

「はあーそれじゃあ俺服部達止めて来るから快斗達の方頼むな」

「わかった」

新一と蘭はそれぞれの喧嘩を止めるべく喧嘩の中心に向かった。

~~~~~平次&和葉side~~~~~

「追い詰めたで平次!!」

「ほんまに悪かったって和葉。許してくれ〜」

「許さへんって・言ってるやないのー!」

ビュッ・パシッ!

怒りの鉄拳は平次の顔面のギリギリで止まっていた。

「そこまで」

「く、工藤君!邪魔せんといて今日こそ平次しめないと気済まへんのやから」

新一は平次をジト目で軽く睨み付け落ち着いた様子で掴んでいた腕を放し和葉に向き直った。

「まあ、とりあえず落ち着いて。服部が勝手に東京来たの俺のせいでもあるからさ。ちよつと事件のことで服部の意見が聞きたくて呼んだんだよ。てっきり誰かにこつち来ることぐらい言ってるかと思つてただけど・言つてなかったみたいだな」

「いや〜連絡しよう思つてたんやけどすっかり忘れててな〜」

「そつか。平次また忘れてたんか」

「・・ゴメンナサイ」

和葉の絶対零度の微笑みに平次は素直に謝った。

「さてと、次は快斗達か。和葉さんはちよつとこつち来て手伝つて、服部おまえは部屋の片付けやつとけよ」

「げっ!これ全部俺一人でやるんかいな」

「当然」

平次の目の前にはまるで嵐が工藤家のリビングに直撃したかのごとく荒れていた。

~~~~~快斗&青子side~~~~~

「うわ〜ん」

「青子悪かったって。もうこんなこと絶対しないからさ、泣くなっ

て」

「そん・・・なの・・・信じられない・・・快斗の・・・うそつき!!」

それだけ言って青子はまた泣き出してしまった。さすがの快斗もここまで泣かれるとどうやって対応したらいいのかわからなかった。

「あゝもうどうすりゃいいんだよ」

「快斗君ちよつと青子ちゃん借りるねv」

「え？」

「あ、和葉ちゃん先に青子ちゃん連れて書斎に行つてて。私、飲み物作ってくるから」

「うん。わかった」

和葉は座り込んで泣いている青子に手を貸して書斎に連れて行つた。
「どうゆうこと？なんで青子を書斎に・・・いや、青子を借りるってどうゆう意味」

あれよあれよと事が進んでく中快斗はその光景を呆然と眺めていた。
ポン

「新・・・」

「ま、後は蘭たちに任せとけ。青子ちゃん時々ああやってひたすら泣きじゃくることがあつてそのたんびに蘭達が書斎に連れてって落ち着くまで一緒に居てやつてるんだってさ」

「そうだったのか。青子が泣くななんてめつたにないからさ俺どうしたらいいかわかんなくてさ蘭ちゃん達に後で礼言つとかなきゃな」

「礼する気あるんだつたら部屋の片付けと晩飯の下ごしらえ手伝えよ。今日は騒がしくなりそうだし」

「にぎやかの間違いじゃないの？名探偵君」

「おまえと服部が揃つたらどう考えたつてにぎやか通り越して騒がしくなるだろ。さつさと手伝えよ」

「はいはい」

その夜工藤家ではにぎやか・・・もとい騒がしい声が響いていた。

5 それぞれの再会（後書き）

前のサブタイトルの数字の付け方間違えましたすみません（<>）
今度から気をつけます。かなり遅れましたが第5弾です！ここは番外編みたいなもので次回からまた本編に入っていきます

6 一時の安息

今日の天気は晴れ。いつものように俺は自分の部屋で目が覚めたはず・・なのに、何であんなに天井が遠いんだ？

なんか変だ。まあ、いいや、もうちょつと寝よ・・・
ドスッ

「グエッ」

「オメーいつまで寝てる気だ？もう9時廻ってるんだからとっと起きろ。すっげー邪魔だから」

「朝から人の腹に蹴り入れって言うことかよ」

快斗は新一に思いつき蹴りを入れた腹を押えて軽く睨んだ。

「人ん家で寝こけといてよく言うぜ。踏み潰されなくなったらさつさとどけ」

「避けて通ればいいだろもうちょつとましな起し方してくれたっていいじゃん」

「勝手に人ん家に変なもん仕掛けた奴に言われたかねーよ。さつさと退け今度は踏み潰すぞ」

快斗はそそくさとその場を退いた。

「あゝ怖っ朝から不機嫌オーラ出まくりだね新ちゃんは」

小声でこっそりと呟き快斗は欠伸をかみ殺してリビングを出た。

「このメンツでトロピカルランドに行く？」

突然振られた話に新一はフレンチトーストを口に運びながら聞き返した。

「そう！前から行こうって和葉ちゃん達と話してたんだけどなかなかみんな都合がつかなかったでしょ？久しぶりにみんな揃ったからせっかくだし行こ」

「お！いいじゃん今ちょうど恒例の花火大会とかやってるし」

「青子一度トロピカルランドの花火大会行ってみたいんだ」

「あそこの花火めっちゃすごいってテレビでもよーやっとなるしね」

次から次へと賛同の声が上がる中新一だけは少し渋っていた。あそこに行く度に事件に出くわすし、あそこは奴らの手によってコナンが生まれた場所でもあるから・

「新一？」

「な、何？どうかしたか蘭」

「えっとコーヒーのおかわりいるかなと思って」

「あ、ああ。頼む」

「うん」

蘭は空のカップを受け取りコーヒーを注いだ。

「よっしゃ！膳は急げや混む前に行こか」

「それじゃ青子達は先に準備しとけよ俺達がここ片付けておくから。アホ子はのろまだから着替えるの遅いしな」

「青子のろまじゃないもん！バ快斗！！」

「どうだかな」

「快斗おまえ一言多い。青子ちゃん慌てないでゆっくり着替えてきなよ」

「うん。ありがと新一君」

青子は満面の笑顔で新一にお礼を言っリビングから出て行った。

「平次サバらんとちゃんとかたづけやるんやで。うちも先に準備させてもらうな行こ蘭ちゃん」

「うん。じゃあみんな悪いけどよろしくね」

パタン

「しかし快斗も素直やないんやな。キッドの時はキザなことしか言わんくせに」

「うるせえお前だって和葉ちゃんといつも夫婦漫才みたいなことやつてるだろ」

「しとらんわ！！」

「オメーら口動かすくらいなら手動かせ。早くしねえと遊ぶ時間なくなるぞ」

「へいへい。なあ、新一」

「何だよ。アイスはないぞ」

「違いーよ！ただ桜ちゃん達が言ってたこと気になったただけだよあの組織がまだ残ってたってこと」

「幹部クラスは全員逮捕されて今は刑務所の中だが、もしまだ幹部クラスのやつが残っててまた復活したら」

「えらいことになるわな」

「奴等が言ってたことを全部鵜呑みにするつもりはないがもしそうだとしたら早いとこ対策立てる必要があるな」

「そやな。前みたいに和葉達泣かせるわけにいかんしな」

「もう泣いてるとこなんてみたくねえし」

血の海、大切な人の涙、生と死を彷徨った時間

彼らはその時を再び迎えることになる。

運命の齒車は少しずつ動いているのだから・・・。

6 一時の安息（後書き）

更新めちゃくちゃ遅くてすいません（泣）最近自分の作品を読み返してみても誤字やら脱字やらたくさんあってビックリしました。ちゃんと見直すべきでしたしかも、私が書く新一は何故かいつも冷たい感じなんですよ。更新遅い上に話進まなくてほんとごめんなさい駄文ですが楽しんでもらえたら嬉しいです。

7 血塗られた影

「よっしゃー！これで終わりや」

「ごくろーさん」

「早く俺達も準備しなきゃマジで時間なくなるぞ」

「ゲーもうそんな時間やバほらさっさと行くぞ」

快斗は平次と新一の背中を押してさっさとリビングを出た。

コンコン

「おい黒羽準備できたんか？」

「もうちよい！よし、準備完了！」

ガン

「ったー！なにさらすんじゃドアホー！」

「悪い。まさかドアのまん前にいるとは思わなくて・・・」

「ちよつとは考えて行動しいや。無駄に頭ええんやから」

「はいはい。それよりみんな準備できてんの？」

「とつくに済んどるで。早く・・・って何やその荷物マジックの道具

でも入ってるんか？」

「これ？まあ、一応つてとこかな」

小さめのリュックを背負い直して快斗は平次を置いてさっさとリビングに向かった。

「なんや？けつたいな奴やな」

今だにヒリヒリと痛む鼻をさすりつつ、平次もリビングへと向かった。

~~~~~トロピカルランド入場ゲート~~~~~

「着いたー！ー！！よっしゃー思う存分遊びつくすぞー！！」

「着いて早々テンション高いなあいつは。なんか見てるだけで疲れる」

はしゃぎ回る快斗を横目に少々呆れ顔の新一。

「良いじゃない。せっかくみんな遊びに来たんだから思いっきり

「楽しまなきゃもったいないよ」

「そうだけだよ。何だかな」

「それに・・・」

「新一、蘭ちゃん早くしないと追いつちまうぞー！」

すでに快斗達は入場ゲートから遠く離れていてこっちに向かって大きく手を振って呼んでいた。

「それに、何だよ？」

「うっん、なんでもない。ほら行こ新一！みんな待ってるよ」

「お、おう」

差し出された手をしっかりと握って快斗達がいるもとへ行った。

「見つけた。まさかここに来るとは思わなかったけど、ちよつとヤバくないお姉ちゃん？」

「ちよつとじゃないわ。かなり危険よ下手したら彼ら怪我だけじゃ済まないわね」

「どうする？明」

「そうね。とりあえず様子見ってとこかしら奴等の一部に私達の顔が知られてるって情報も入ってるし、それで、何か言いたいことでもあるの桜？」

好奇心が満ち溢れた目で桜はずっと明のことを見ていた。

「ん？お姉ちゃんかつこ良いな」って思ってた。そこら辺にいるアイドルとかよりかつこ良いんだもん私は幸せ者だね」

「誉め言葉になってないわよ」

「えゝ？だって本当のことだし、それに拓兄もかなりのイケメンだしね。両手に花って感じ？」

あのイケメントリオより断然いいよ！ここまで男装が似合うお姉ちゃんはいないって」

「それは、どうも」

「さてと、それじゃ私達もそろそろ行こ！何にもしないでウロウロしてたら逆に怪しまれるしね」

「無線が繋がる範囲にいなさいよ。彼らがいつ接触するかわからな

いんだから」

「はい」

明は拓人に桜のことを頼み二人と別れた。

「お姉ちゃんこれから逆ナンにされまくりそうだね。みんな目光らしてるし」

拓人の数歩前を歩いていたらいきなり拓人に腕を掴まれ引き戻された。

「・・・俺からあまり離れるな。一人じゃ、危険だ」

「うん。わかってるよ、私も志保ちゃんと同じだからね」  
ポンポン

拓人は桜の頭を軽く手を置いた。

「拓兄は優し過ぎるよ。それに私に甘過ぎ自覚してる?」

「わからない」

「もう! いつつもそればかり。でも、ありがと。行こう! 拓兄ま  
ずはビックリハウスからね」

「ああ」

「それでは、レッツゴー!!」

一方新一達は新しくできたアクション型ダンジョン『悪魔の巣窟』  
に向かっていった。

「うわ・・・何か不気味な所やな」

「そうか? なかなかリアリティーあっておもしろそうじゃねえ?」

「そうだね。おもしろそう! 早く行こ!! 蘭ちゃん達も早く」

青子が満面の笑顔で振り向くと蘭が放心状態で立ち尽くしていた。

「蘭ちゃん?」

「え? 何? ごめん和葉ちゃん何の話?」

新一は軽いため息をつき放心状態だった肩を引き寄せた。

「決まりだな。俺と蘭は出口で待ってるから快斗達行ってこいよ」

「ちよつと新一。私」

「まあ、ちよつと待て。蘭ちゃんこれ外見はこんなんだけど実際はそんな怖いものじゃないんだ。中は出てくる敵を倒しながら迷路を抜

けるRPGみたいなものだからそんなに怖がることないよ。それに、出てくる敵もたまに反撃してきたりするけどほとんど張りぼてみたいなものだし、何より結構ストレス解消になるってことで人気あるんだぜ」

「ストレス・解消？」

「そ！なかなか手込んでておもしろいから新一も退屈しねえだろうよ」

「おい、快斗」

「やる、私やりたい」

「そうこなくっちゃ！！二人一組のペアで行くからな。あ、そーだ。せつかくだから賭けしようぜ」

「「賭け？」」

「出てくるのが一番遅かったペアが他のペアにここの名物アイス『トロピカルデラックス』を全員分おごること」

「でも、あそこすぐく人気あつて最低でも1時間は並ばないと買えないよ？さっき通った時も結構並んでたし」

「げ！なんでアイスくらいでそこまで」

「わかつてないな名探偵。それも兼ねての罰ゲームだよ」

「マジかよ」

「もちろん」

快斗の案に大阪組はすぐにくいついた。

「ええやんそれ。うちのつた！」

「おっしや！がぜんやる気出てきたでー」

「それと、このアトラクションタイムも計ってるらしくてそれぞれプレイヤーがアトラクション側が用意したこの時計をして、アトラクションに入る。入ったと同時にカウン트가始まり出たときに自動的にカウン트가止まり記録されるんだ」

「へえ！すごい」

それぞれ渡された腕時計をしっかりとつけ、いざ入場。公平にジャンケンで順番を決め結果



平次・和葉ペア　快斗・青子ペア　新一・蘭ペアの順に行くことになった。

「ほな、お先」

「ドジるなよ平次！」

「誰がドジるかー！」

快斗の声援（？）を受け平次と和葉は入っていった。

5分後、快斗と青子もダッシュでスタートを切った。

「快斗君達やる気満々だね」

「あの二人はこういうの大好きだからな。それより本当に大丈夫なのか？今ならまだ間に合うぞ」

「ありがと。でも大丈夫よ！今はむしろわくわくしてるくらいなんだから」

「なら、いいけど」

「次の方どうぞ」

係員に呼ばれ二人はアトラクションに足を踏み入れた。

「遅かったか」

明は肩で息をしながら小型無線機を取り出した。

「桜聞こえる？彼らが先に例のポイントに入った」

「え？本当に？あちゃータイミング悪すぎだよ」

「とにかく急いでこつち来て中に入って彼らに現状を伝えて。私は外から奴等の動きを探るから」

「了解！」

プツ

「拓人聞こえてる？」

「ああ」

「桜から目離しちゃだめよ。奴らはまだ桜のこと狙ってるんだから」

「わかってる。絶対死なせない」

「よろしく」

プツ

「今は彼らの力を信じるしかないわね。どうか無事でいて」

血塗られた影達は少しずつ彼らに近づいていた。  
どす黒く染まった手を新たな獲物の鮮血で染め上げるために。

## 7 血塗られた影（後書き）

更新遅くてすみません。今日でちょうど90日更新していませんでした。これからは出来る限り早く更新できるように努力するのでこれからよろしくお願いします！！

## 8 始まりの時

「『悪魔の巣窟』入り口ゲート前」

「ねずみどもは檻の中に入ったか？」

「ええ、全員入りやしたぜ」

「檻の中のねずみを狩って何がおもしろいのよ。ジン」

「逃げ回られるのも面倒だ。それに、モルモットは檻の中で死んでいく運命だ」

「いい趣味してるわ。ゾクゾクしちゃう」

「行くぜ。ねずみどもの血を悪魔にくれてやるためにな」

三つの影が、『悪魔の巣窟に』ゆっくりと溶け込むように消えていった。

「うわーようできとんな、本物の城の中みたいや。いかにもRPGって感じやね」

「そやな。工藤に絶対勝ってアイス奢らせたる！」

ガシ

「うわ！な、何や！？」

「お、お待ちください！旅のお方どうか私どもをこの国を・・・お救い下さい」

使用人の格好をした女が平次の右足首を掴み懇願してきた。

「びびった。ただの人形か」

「いよいよ始まったんやな。それで、うちら何すればええの？」

「この国を支配する魔王ギラクを倒して。奴はこの城のどこかに身を潜めているんです」

「なるほど。そいつ見つけて倒してクリアってわけやな何や思ったより簡単やな」

「ですが、魔王は不死身で何をしてても倒れません。魔王を倒す唯一の方法は、この国の秘宝

『女神の涙』を祭壇に治めればその聖なる力により魔王は滅びます」  
「結構大変やな。その秘宝つちゅーんはどこにあるんや？」

「それは・・・」

ガシャン

大きな音とともに電気が消え辺りが暗くなった。

「まだヒント聞いてもないのにスタートってのは随分せこいのー」

「なんかおかしくない平次？」

「心配せんでもええて和葉。これもこのアトラクションのイベントやろ」

不安になった和葉は平次に服の裾を掴み小さく震えていた。

「ほれ。怖いんやったらしっかり掴んどき。はぐれてまうで」

「だ、誰も怖いなんて言ってないやん！ただちよつとびっくりしただけや」

和葉は、差し出された手を取らずにそっぽを向いた。

「体ガタガタさせといてよう言うわ。ほならさっさと行くで早よせんと抜かされるからな」

「待って！」

平次が先に進もうとした瞬間和葉が平次の左腕にしがみついた。

「あんな、やつぱりちよつと左手貸してもらってもいい？」

「そないびびつとるなら、そのまんましがみついき。そっちの方がええやろ」

「うん・・・ありがとう」

和葉は少し照れくさそうに笑った。

『あない泣きそうな顔でいられるよりずっとましやな』

平次は不覚にも赤くなってしまった自分の顔を両手で軽く叩き気合を入れなおした。

「行くで！なんとしても一番乗りや」

「うん！」

一方後に入った快斗と青子は暗い中を手探りでゆっくりと進んでいた。

「かいと〜どうなってるの？なんでいきなり暗くな」

快斗にしがみ付いていた青子は、突然快斗に口を手で塞がれた。

「し〜！静かに。ちょっと黙っててくれよ青子。大丈夫ちゃんとオメーの側にいるからよ」

コクコク

青子は軽く頷き自分の口を両手で塞いだ。

『おかしい。このアトラクションで、こんなことはしないはず。それに、仕掛けた

盗聴器から微かに聞こえる会話からすると・・・こりゃ思ったよりヤベーな』

快斗はポケットからペンライトと二つのカフスを取り出し、その一つを青子に渡す。

「カフス？」

「新一が昔、使ってたイヤリング型携帯電話を俺がカフス型に改造したんだよ。発信機もついてるからゼッター失くすなよ。それと、こいつもちゃんとつけとけよ」

快斗が一つのシルバーリングを投げ、青子の両手に落ちてきた。

「指輪・・・この真ん中のキラキラしてるのって宝石？」

「いや、ただのガラスだよ。そっちのカフスが受信用でこっちの指輪で相手と連絡を取る」

「へえ〜すごいね」

「そのガラスのときは緊急時のときに押せよ。それと、この通信機は盗聴器用のものだから、小声でも聞こえるからいつもみたいなバカデカイ声で話すなよ。耳痛くなる」

「青子そんな声・・・むぐ」

「し〜！だから、その声がでかいって言ってんだよ。いいか、青子落ち着いてよく聞け、今このアトラクション内には新一を小っさくした奴らがいる。あいつら、俺らをずっと尾行してたみてーだからそろそろ動くと思ってたが、まさかこんなとこで動くとは思わなかったけどな。幸か不幸かこのアトラクションは武器なんてそこらじ

ゆうにあるから新一と平次たちは大丈夫だ。俺はこれから仕掛けしてくつから、新一か平次達と合流して一緒に行動しろ。できるな？」

青子は口を塞がれたままブンブンと首を横に振り、快斗の手をはがした。

「やだ！快斗行かないで！あの時みたいになんた待ってるだけなんて置いてかれるのはいやだよ」

泣かないように必死に涙を止めて快斗を見つめる青子。

「ごめんな。青子」

泣きそうな青子を快斗はやさしく抱きしめた。

「いつも、そればかりだよ。バ快斗」

「わりーな。すぐ戻ってくつから、それまでおとなしくしてろよ・・じゃあな」

ポン

煙幕と共に快斗の姿は消えていた。

「戻って来なかったら、一生許さないんだから」

~~~~~

ピピッ

「はいよ。どちらさん」

『快斗、デメエどうゆうつもりだ』

通信機から聞こえてきたのは怒気の含んだ新一の声だった。

「あらら、さっきの話聞いてたんだ。話聞いてたなら、青子のこと」

『断る』

「言うと思った。仕方ねーだろ、中枢近くに乗っ込むんだからよつと」

次から次に出てくるモンスターを倒しつつ、快斗は急いで組織の中枢に向かっていった。

『中森さんの気持ち考えたのか？この暗闇で一人きりで、おまえを待ってるんだぞ。どれだけ辛い気持ちなのかわかってんのか？あの

子の手をとって守ってやれるのは快斗・おまえだけだろ』

「分かってるつもりだよ。それでも、今は無理だ。あいつらは一人残らず牢にぶち込めなきゃいけないーんだ。危険な獣は檻の中に入れたかなきゃ危ねえーだろ」

『だからって一人で危険な行動に走んな。俺らがいるだろうがよ』

「もちろん名探偵たちにはちゃんと働いてもらうさ。それでも、動きやすいほうがいいだろ？」

それをするのは俺の役目なんだ。信頼してるからこそ青子のこと頼む」

快斗の声は、いつものふざけた声色ではなかった。快斗は本気なのだろう。

『ハア。高くつくぞ』

「そうこなくっちゃ。よろしくな、名探偵」

『あ、それと人のポケットにこっそり変なもん（通信機）入れるくらいなら、先に渡せ』

「ひっでーな。それ改良すんの結構時間かったんだぜ。ちゃんと説明書もつけてやっтар」

『どっちがひどいんだか。おまえ俺らのこと信用してないのか？こんな回りくどいことしやがって』

「・・・悪い」

『まあ、いい。とにかくお前は準備が済んだら、アトラクションの中心の広場に向かえ。あそこは広いし、隠れる場所がいくつかあるからな。絶対に来いよ快斗』

「了解！」

ブツ

快斗は通信を切り、走るスピードを上げた。

「ぜってー奴ら全員監獄のなかにぶち込んでやる！！」

黒き獣の影は、薄ら笑いを浮かべ、獲物をすでに視界に捕らえていた。

「さあ、狩りの時間だ」

8 始まりの時（後書き）

なにやら、色々矛盾してる部分がいくつかありますけど、気にしないでください。それと、私はRPG全くわからないくて、そこら辺はほとんど想像で書いてるものなので、広い心で流しちゃってください。

読んでくれて、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0781a/>

信じてる・・・

2010年10月22日00時22分発行